月刊

こころのとも

第八巻
十一月号

迷惑お断り

生きている限り
人に迷惑をかけるのは
当たり前だと
はばからず言う人がいる

なるほど
そうかも知れないが
でも
そういう人ほど
他者へのお布施の
こころがない
つまり
人に迷惑はかけても
人から迷惑をかけられるのは
お断り

幸せへの感性

幸せを
人に産み出す
感性は
人の心を
感じるこころ

人生を考え直してみたい人は（四七）

―『聖書』解説（二二三）―

三一　そういうわけだから、何を食べるか、何を飲むか、何を着るか、などと言って心配するのはやめなさい。
三二　こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。
三三　だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。
三四　だから、あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。

出だしの三一節は、先月号に取り上げた二五節の中の次の部分を繰り返しています。もう一度、先月号をご覧ください。

「自分のいのちのことで、何を食べようか、何を飲もうかと心配したり、また、からだのことで、何を着ようかと心配したりしてはいけません。いのちは食べ物よりもたいせつなもの、からだは着物よりたいせつなものではありませんか。」

次に、三二節の「こういうものはみな、異邦人が切に求めているものなのです。しかし、あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます。」という部分ですが、少し解説しておきます。

まず異邦人ですが、よその国の人たちという意味だけではなく、先月号の最後で「信仰の薄い人たち」と述べていましたように、そうした人たちも含んでいます。ですから、そういう信仰の薄い人たちが、食べたり、飲んだり、着たりするものを切に求めるのだ、ということです。ここで、切に求めると言いますのは、それを人生の目的にするという意味です。いくら信仰のあつい人でも、食べるもの、飲むもの、着るものなど生活に必須のものは、必ず買い求めたり、自ら作ったり、手に入れたりしなければなりません。ですから、ここでは、それに「執着」して、それを生きる目的にしてはならないと言っているのです。

次の「あなたがたの天の父は、それがみなあなたがたに必要であることを知っておられます」という部分ですが、なぜ知っておられると言えるのでしょうか。

人類の歴史上、どれほど信仰があつくても、食べたり、飲んだり、着たりするものに不自由したことは、いくらでも、あったと思えます。最悪の場合には、餓死や凍死することすらあったのではないでしょうか。でも、それでも知っておられると言えるのでしょうか。

実は、そう言えるのです。なぜかと言いますと、私たちは人間は誰でもが、普通では意識できない心の奥底に、神（仏）さまを宿しているからなのです。その神（仏）さまは、私たちが、望んだり、感じたり、行ったり、考えたりする全てのことをご存じなのです。ただ、無意識でのことですので、私たちの方で、神（仏）さまを知らない、あるいは知ろうとしていないから、そのことが分からないだけなのです。

もし知ることができるならば、この世で起こる全てのことは、神（仏）さまのおはからいによるのだと、確信することができるのです。

たとえ、食べたり、飲んだり、着たりするものがなくなって、飢え死んだり、凍え死んだりすることになっても、それも神（仏）さまのおはからいで、お前のこの世でのつとめは終わったので、もうこちらに来いと仰っておられると、感じることができるのです。

でも、どうしたら神（仏）さまが全てのことを知っておられることを、実感として、知ることができるのでしょうか。それがとても大切なことなのです。

このことを、別の言葉で言いますと、それは、神が全知全能であることを知ることだと言えます。老子の言葉で言いますと、「無知而無不知（知ること無くして、知らざること無し）」ですし、ソクラテスの言葉で言いますと、「無知の知（自分自身を知る）」ということなのです。

おそらく、こんなことを言いましても、大多数の方は、何のことを言っているのか、よくお分かり頂けないと思うのです。でも、私の言うことが、実感として、全てお分かりいただければ、すでに何も私なぞが書くことは無くなっているということです。すでに、釈尊も老子もソクラテスもキリストも、同じことをいっているのですから。私は、ただ、現代人にできるだけ理解しやすいように、現代人向きに理屈っぽく述べているに過ぎないのです。

ただ、このことが、心底からお分かり頂くためには、修行がいります。この拙文もその動機付けに過ぎません。

毎日、毎日、ひたすら修行する以外に、方法は無いのです。しかも、それは他者から強制されていやいやしたり、現在の日本の僧侶の大多数がそうなっていますように、お布施を頂くためや、金儲けや、自己宣伝の手段としてするのではだめなのです。いや、悟りのためや、人の役に立つためと思ってすることすら、だめだと言えるのです。ただひたすら、神（仏）さまや聖者を心から信じ、自らを律し、自ら進んでするのでなければだめなのです。段々と神（仏）さまを信じることができなくなってきている現代人にとって、そこが、とても難しいことだと言えるのです。

次に進みます。

三三節の「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます。」の部分ですが、結構むずかしいのではないかと思います。

神の国は何度も述べてきましたように、ほかのどこでもない、私たち人間の一人ひとりの心の中にあります。先にも述べましたように、ただそれを実感できないだけなのです。

ですから、それを知るためには、まず、神の国を何にも増して第一に求めなければならないのです。それを信じ、ひたすらそれを求めなければならないのです。

次の、神の義ですが、これは昨年の四月号で取り上げた「六 義に渇いている者は幸いです。その人は満ち足りるからです。」で、解説しましたように、神が正しく、完全無欠であることを言います。人間は、全ての人が、キリスト教で言えば原罪を、仏教で言えば宿業を背負って生きています。その原罪や宿業から抜けられるように、人間なら誰でもが、完全無欠な神の心境に至ることをひたすら求めなければならないのです。そうしないかぎり、人類を滅亡から救う道はないと思えます。

最後に有名な三四節です。「あすのための心配は無用です。あすのことはあすが心配します。労苦はその日その日に、十分あります。」

私たち人間だけが、時間を意識することができます。人間は、明日（未来）を夢見ることができますが、しかし、それと同時に、昨日（過去）の「しがらみ」から逃れることはできません。そして、今（現在）に、その統合を生きているのです。統合の過程として、明日を思い煩うわけですが、大切なことは、思い煩いを少なくし、いまに徹して、常に最善に生きることです。なかなかでき難いことですが、そうすれば、その日その日が充実して、時間を超えることができるのです。

自作詩短歌等選

健康法の早死に

健康法を
駆使してきたのに
癌になって
死んでいくのは
とても残念だ
という
そして多くの人は
それをあざ笑う

でも
いのちは
誰でもが
大切にすべきもの
お迎えがくれば
誰でもが
喜んでいくべきもの

煙草と酒への執着

不摂生していても
長生きする人がいる
だから
私は
煙草も酒も
やめない

こう言う人ほど
自分の生命への執着が
強いのだ

自己の生命への
執着の無い人は
自己の欲望への
執着もない

共食するということ

国立民俗学博物館長
石毛直道氏は
人間の食の特徴は
料理（調理）をすること
と
共食をすること
の二つだという

まさに
皆で分け合って
食べることこそ
人間的なこと

調理することは
人間のこころを
欠いた人にも
できること
また
人類進化の
ずっと後になって
はじめて
現れたこと

ちょっと失敬

女子大寮
ものがつぎつぎ
紛失す

お互いが
買えば買えるが
ひとのもの
ちょっと失敬
軽い気分で

共に食う

共に食う
人間らしき
行いは
人と人とが
触れ合う基本

インターネットの繁栄

世の中に
インターネット
発達し
エゴ追求が
さらに栄える

闇のさまよい

近代の
自我確立は
己から
他己を追い出し
自己のみと
成る無明への
闇のさまよい

死が地獄

昔は
死後
「地獄に落ちる」
と言った

でも
今は
死そのものが
地獄になっている

迷惑許さず

誰でもが
気づかぬうちに
悪かさね
生きているのに
目に見える
小さな迷惑
許せざりけり

親の無責任

一歳の
子に目をかけず
けがをさせ
親の責任
問うをいぶかる

迷惑ばかり

ひとさまに
迷惑ばかり
かけて生き
嘆き悲しむ
何の価値ぞや

身体の物象化

自分の体が
単なる自分の環境
つまり
自分でいじれるもの
となってきている

それは
自分の体の
物象化

自作随筆選

私生活主義世代論

この十月二十一日（火）付けの毎日新聞「記者の目」欄に「元気のない？！三十歳代男性」「どこが悪い『自分に忠実』」という見出しで、同新聞の学芸部所属の大井浩一という三十歳代の記者が、自分の意見を記事にしていました。

この毎日新聞の「記者の目」という欄は、記者が自分の本音を直（じか）に述べることが多いので、私も、大体、見出しを見て、関心のある領域のものには目を通すようにしています。

この記事も、大井という記者の本音が出ていて、現代の若い人の考え方を知るのに、とても役立ちました。

と言いますのは、結論的なのですが、それは、まさに私が言い続けている、現代人の「自己肥大」、「他己萎縮」を典型的に示すものだったからです。さらにその上、「どこが悪い『自分に忠実』」と見出しにありますように、自分ではそれに気づけず、正当化さえしている点で、唖然としてしまうものだったからです。

どう記事に書かれていたか、見ていきたいと思います。

今三十歳代の人たちは、「団塊の世代」に続く人たちなのですが、その特徴として、「会社への帰属意識が薄い」「家族より自分を大切にする」「家に帰りたがらず、接待がない日でも飲み歩く」「妻との会話もそこそこに、自分の部屋に閉じこもる」「未婚率の高さ」などが、挙げられるようです。

この人たちは、実は、既に一九八〇年代に「新人類」「オタク」と呼ばれたということです。「新人類」は、会社への帰属意識が薄く、無気力でだらしがない新入社員像として使われ、「オタク」はアニメやＳＦなどの趣味に没入する若者というニュアンスで使われたと言います。

この記事の中で同氏は、何人かの作家、学者、ジャーナリストなどの意見を紹介しています。同氏は、この世代を「とらえどころのなさ」を本質とするとしていますが、社会学者の宮台真司氏は、「・・・昭和四〇年代生まれになると、すでに豊かで、何が幸福なのかというイメージは個人個人で分化する。その結果、自己の快・不快に忠実に生きる『私生活主義』の傾向が強まる。」と話している、と述べています。

また、同氏の友人の一人は「高度成長の完成で、目標

を失った世代の先頭が自分たちでは」としているとのことです。

結論的に、この記者は次のように述べています。

「『〔私生活主義〕は三十代だけの特徴ではなく、二十代、十代と年齢が下がるほど強くなる』（宮台氏）。・・・この世代が主役の時代は、いや応なく始まっているともいえる。・・・おそらく私たちは連携することも、普遍的な理念を叫ぶこともない。一人一人がやりたいことをやっていくに違いない。そして、それでいい。そこからしか何も始まらない、と私は思う。」

もう一度、キーワードになりそうな言葉をあげてみますと、「自己の快・不快に忠実に生きる『私生活主義』の傾向」「目標を失った世代」「連携することも、普遍的な理念を叫ぶこともない」「一人一人がやりたいことをやっていく」などです。

これらの言葉は、私の理論でいいますと、まさに「他己」、つまり、社会性を喪失したことを示す言葉です。

私はこれまで何度も書いてきましたように、現代は、大学もその例外ではありませんが、個人主義・民主主義が行き過ぎて、個人個人の判断が、善悪、正邪、真偽などではなく、自分の「利害得失」や「好き嫌い」に基づいてなされるようになっています。政治的に言いますと、それは衆愚政治（オクロクラシー）に陥っていると言えます。

先程の「私生活主義」は、自己を肥大させ、自己に閉じこもって、他己を萎縮させてしまっていることを、まさに示す言葉です。

自己に閉じこもりますと、社会的定位ができなくなってきます。心理的に不安になります。それを解消してくれるのは、自己の欲望の満足なのです。具体的には、食欲（物欲・金銭欲・財産欲などを含む）、性欲（先祖・子孫への執着などを含む）、優越欲（名誉欲・権力欲）などの満足です。

また、自己を肥大させますと、未来への展望をもつことができなくなってきます。難しくなって恐縮ですが、未来は過去があるからあると言えるのです。私の理論では、過去は他己で、未来は自己です。そして、現在は過去と未来の統合です。ですから、自己が肥大し、他己が萎縮しますと、その統合である現在がなくなってくる、つまり、時間そのものがなくなってくるのです。「目標を失った世代」と言われるのは、そういうことです。ということは、刹那的に自分の好きなことを好きなようにするだけの世界になってくるのです。記者の結論で述べる通りになってくるのです。

釈尊のことば（六三）

―法句経解説―

（二一九）久しく旅に出ていた人が遠方から無事に帰って来たならば、親戚・友人・親友たちはかれが帰って来たのを祝う。

この偈の意味をどう受け取るか、文字通りなら当たり前のことのように思われます。ただ人情の機微を詠んだだけのものといえます。でも、何か宗教的な意味を読み取らなければ、この偈の存在の意味がないように思えます。皆さんはどう思われますか。なかなか難しいのではないでしょうか。私は、次のように考えたらどうかと思います。

まず「久しく旅に出ていた」ということですが、これは、人間がこの世に誕生して、久しく生きていることを意味するのではないかと思います。

次に、「遠方から」ということですが、なかなか意味深長です。私たちは生まれたとき、自己と他己は未分化ながら統合されていますが、成長・発達の過程で自己と他己は分化し、自己が肥大していきます。特に現代ではそれが過大となっています。遠方とは、自己への執らわれの垢がたくさん付いていることを言っているのではないかと思います。仏さまの世界から遠く隔たっていることを意味しているように思われるのです。

次の「無事に帰って来たならば」ということですが、ですから、仏さまの世界に無事に帰ってきたということです。仏さまの世界とは成仏した世界のことです。成仏とは、死んで仏に成る成仏が一般的ですが、弘法大師の言われた生きてこの身のままで成仏する即身成仏もあります。ここでは、まさにこの生きたままの、つまり無事な成仏（＝解脱）のことを言っているのだと思います。

もし、そうなったなら「親戚・友人・親友たちはかれが帰って来たのを祝う」というわけです。では、彼の親戚・友人・親友とは誰のことでしょうか。おそらく、過去において既に解脱した人たちのことではないかと思います。

仏教には、「七仏通戒偈」というのがあります。過去の七人の仏になった人、つまり解脱した人たちが説いた共通の教えという意味です。こうした過去に解脱した人たちが親戚であり、友人であり、親友であると言えるのです。それらの人々が喜んで祝福してくれているのです。でも、そのことは、解脱した人にだけ分かることだといえるのです。

（二二〇）そのように善いことをしてこの世からあの世に行った人を善業が迎え受ける。――親族が愛する人が帰って来たのを迎え受けるように。

この偈も前の偈と同様に、文字通りにここに出ている、「この世」と「あの世」を「現世」と「死後の来世」と捉えるのではなく、どこまでも比喩的に考え、あの世を死後の来世ではなく、この世で解脱した（大死一番）後の世界と捉えたいと思います。

この世で解脱するためには、自己への執着を捨てなければなりません。それは、それまで身につけてきた生き方を全く捨てることを意味します。つまり、自己の生命への執着を捨てるわけです。それは、ある意味で死を意味するといえます。

私の理論で言いますと、「自己」は無意識（髄識）の「生命蔵識」を根源とし、「他己」は無意識（髄識）の「如来蔵識」を根源としています。

自己が生きることを追求する世界とすれば、他己はそれを否定する世界です。つまり、死の世界だと言えます。私たちが生きることへ執着を強くし、自己に閉じ、自己を肥大させればさせるほど、つまり、仏さまの世界から遠ざかれば遠ざかるほど、仏さまはそれに対する否定として働きかけてきます。死が恐怖や不安として、ますます迫ってくるのです。ハイデッガーのように、未来から死が迫って来ていると考えてしまうのです。

ところが、生へ執着する自己を捨て、ひたすら他己を働かせて、仏さまに従って生きていこうとするとき、恐れや不安であった死は、逆に自己を支える仏さまの働きとして、否定の働きから肯定の働きへと変化するのです。そして、それによって無上の「大楽」を与えて頂けるのです。そのとき、真の自由自在が得られます。しかし、その自由は、字の通りに「自らに由る」のですが、他己と自己の統一としての「自ら」ですから、他者を無視したり、踏みにじったりすることがありません。また、法から逸脱することもないのです。

しかし、こうした大楽・自由自在を得ることができるのは、私がその心理学的メカニズムを説明し、それを理解できたからではありません。理解といった意識の働きでできることではないのです。自己と他己の真の統合は、無意識の働きなのです。無意識は、意識して直接的に制御することはできません。ただ、意識を滅し、自己を滅したところに輝く出てくるのです。しかし、自己や意識を滅するには、修行することが必要です。なぜなら、普

通の人生の経験の中には自己や意識を滅するなど、ないことだからです。ですから、そうする訓練・修行・精進がいるのです。ひたすら、毎日、そうするだけなのです。そうなろうとはからうことすら、してはならないのです。

第一七章　怒り

（二二一）怒りを捨てよ。慢心を除き去れ。いかなる束縛をも超越せよ。名称と形態とにこだわらず、無一物となった者は、苦悩に追われることがない。

怒り、慢心、束縛、これらは、私の理論で言いますと、すべて自己に執らわれたときに起こってくる心の働きです。なお、束縛とは、このテキスト（岩波文庫『真理のことば　感興のことば』）の訳者である中村元先生の訳注によりますと、「人を結びつけ縛る煩悩」のことだとされていますが、もっと広く解釈することもできます。確かに、人間の精神を縛るものの主たるものは、煩悩ですが、その煩悩へ執着（自己肥大）した結果として起こる社会定位を欠いた行動も、その中に含めることができると思います。例えば、人のことがやたらと気になり、人から支持や承認、愛情を得たがることなどです。

ですから、怒り、慢心、束縛などから逃れるには、自己への執着を捨てなければなりません。

そうすれば、名称や形態にこだわらなくてもよくなるのです。この名称や形態ですが、名称とは名、形態とは形ですから、名と形のあるものに執らわれるなということになります。それは、人間が名を与え、存在を確認したすべてのもの、つまり自分も含めてこの世に存在する全てのもの、ということになります。

そうしたこの世に存在する全てのものへの執着を捨てた人は、次にある「無一物となった者」というわけです。そうなった者には、「苦悩に追われる」ということがなくなってくるというわけなのです。

苦悩とは、仏教でいえば「生老病死」の四苦と、それに「怨憎会苦（おんぞうえく）」「愛別離苦（あいべつりく）」「求不得苦（ぐふとっく）」「五取蘊苦（ごしゅうんく）」の四つを加えた八苦があります。

こうした苦悩は、理屈で逃れられるわけではありません。いくら苦しまないでおこうと思っても、嫌な人を好きになるのは難しいですし、好きな人と別れるのは悲しく、辛いものです。

修行・精進していくとき、気づかないうちに、自己への執着を離れることができるようになって行くのです。

後記

一、十一月六日から八日まで、北九州へ児童青年精神医学会で出張しました。車で行きましたが、紅葉がとてもきれいでした。

二、その前日から風邪を引き、それをおして行ったせいか、だんだんひどくなり、精神的緊張を伴うことには意欲がわかず、たまっていた新聞切り抜き（スクラップ）の整理などをしました。そのため、本誌の発行が十日ほど遅れてしまいました。

三、今月一日づけで、本誌に毎号、表紙の絵を寄せて下さっています小原白峰氏が、『人権禅画集―達磨画人権標語集―』を自費出版されました。

四、もともとカレンダーにする予定で十二枚の達磨画と人権標語を描いておられたのですが、もったいないので本にしては、とお勧めして、この本にまとめられました。

五、私も、その標語を読ませて頂いて、思うことを五百字程度で書き添えさせて頂きました。

六、多くの方に読んでいただいて、少しでも人権とは何か、人間とは何か、について考える機会になれば幸いです。ご希望の方がありましたら、私から取り次ぎをさせて頂きます。千円と送料三一〇円（一冊の書籍小包代）を「ひびきのさと」に郵便振替でお送り下さい。なお、大きさはＡ４判で、総頁数は四四頁です。人権禅画の他に、同氏の禅画作品が四六枚、写真で載せられています。

七、私も、このところ「人権」のことをきっちり哲学的に、私の理論で考えておきたいと思い、憲法の本や人権の本を読んでいます。有り難いことに、そんなことに呼応するように、小原氏のお計らいで人権週間に際して毎年なされている徳島県下の人権キャンペーンに、今年参加させて頂けることになりました。県下六ケ所で、今年は各市町村の長が付く方々の啓蒙をさせて頂くことになっています。パネルディスカッション形式で、五人のパネラーで行われます。

月刊　こころのとも　第八巻　十一月号（通巻九十五号）

平成九年十一月八日
〒７７２―８５０２
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号０１６１０―８―３８６６０